

一 スキー揺籃時代ようちん

**スキーを作る** 私がスキーというものを初めて知ったのは、今からおよそ三十年も前のある正月のことだった。それはレルヒ中佐が雪の高田「新潟県」で、日本最初のスキーをやり始めてからまだ間もない頃のこと、場所は私の生まれ故郷、上州赤城山だった。

何でも、気の早い一高あたりの学生が、どこかで手に入れたスキーを、早速赤城山へ担ぎ上げてきて、外輪山の中の平地を主として歩き回っていたように思う。前橋道の粉雪の上に、二本のシュプールが鮮やかに残っていたことを覚えている。

そこで私も早速真似をしてみようと思ったが、当時はまだ本格的のスキーや、靴を売っている店など無論なかったので、仕方がないから家にあつた一センチ半くらいの厚さの栗の木の板を削って形だけこしらえてみた。しかし先端の反りを、どうしてつけるものかわからないので、何でも水分と熱を与えたらいいだろうと思って、お風呂の中へ突っ込んだり、石油の空罐あきかんで茹でたりして、苦心さんたん惨憺さんたんのすえともかくもスキーらしいものを作った。でも、乗ってみると板が薄すぎて真ん中から折れそうになるので、また同じ板を削って、中央だけ二枚重ねて釘づけに

した。

バックンは、太い針金とトタン板で作り、細引きのビンディング「固定具」で編み上げ靴へ結わいつけ、手頃な物干し竿を杖に突いて、さっそうと粉雪の山へ出かけていった。思えばこれが私のスキーというものに病みつく第一歩であった。もちろん、当時はまだワックス等のあろうはずもなく、ろうそくのろうを塗ることさえ知らなかったのだが、雪がよかつたおかげで滑走面に雪のつくようなこともなく、どうやら無事に歩くことはできた。そして歩くだけでも大きな魅力だった。

それからは、珍しいので毎日毎日出歩いてしたが、そのうちに、だんだんスキーが足に慣れてくると、それまでは「輪かんじき」で埋まりながら重い足を一步一步運んでいたところを、割合楽に、スウスウと渡っていけるようになったものだから、すっかり有頂天になってしまった。今までは何となく出るのがおっくうだった雪の山が、この時から急に樂園のような気がしてきた。そのうちに、冬になってから毎日自分の部屋の窓から見上げてばかりいた山の尾根へも出てみられたり、ひと冬に一度か二度も行くかどうかわからなかった小沼<sup>こぬま</sup>辺りへも、粉雪の上へ二本のシュプールをつけながら、気軽に出かけられるようにもなった。こうなると、もううれしくつてたまらなくなり、家へ帰るとビンディングを直したり、竿の先へ金具を取りつけ

たり、また新しいスキーを作ってみたり、もう寝ても覚めてもスキーだった。

だが雪の山は、いつもそう安易な楽園ばかりではなく、しばしばはなはだ辛い楽園でもあった。斜面へかかって滑ろうとしてもスキーが悪かったせいか、緩い所ではなかなか動き出そうともしないでいて、急な所へ来ると、いきなり滑り出すので、ものの一メートルも行かないうちに尻もちをついてしまうようなこともあった。教わろうにも教えてくれる人はなく、読もうとしても本もなかった。今ならば二、三時間か半日くらいで誰でも覚えられる程度の直滑降が、どうにかできるようになったのは一カ月もたってからのことだったと思う。それでも一二、三度の斜面が、二、三〇メートルも転ばないで滑れるようになるとその味が忘れられず、痛い思いをしながら夢中になって練習した。

そのうちに、いつの間にか、キックターンらしい向きの変え方も覚え、ジグザグに登るコースの採り方の見当もついてきたので、だんだん遠出して山へも行けるようになった。しかし山には木がたくさんあるから、どうしても滑りながら曲がらなければならぬ必要に迫られることが多かったのに、スキーは、ちつともいうことを聞かないで、何としても曲がつてくれなかった。今思えばゾンメルシーに毛の生えたくらいの短い軽いスキーだったのだが、まったく手におえないもののような気がした。強いて曲がろうと思えば必ず倒れ、頑張つて行けば、きま

って立ち木に抱きついた。そのようにして最初のシーズンには、さんざん苦勞をしたが、結局滑走しながら方向を変えることは不可能に近いことかと、半ば諦めたかたちだった。

やがて迫い迫いと春が近づいてくると雪の質が変わってきて、朝登る時はまだよかったのが、下る頃には温度が上がってきて、ワックスを塗らないスキーの裏には遠慮なく雪がくっつき、滑ることはおろか、歩くことさえできなくなってしまつて、泣き出したいような思いもしばしば経験した。思えば憐れな、しかし懐かしい最初のシーズンであった。

**スキーの実用化** 大いに意気込んでいたのだったが、その次のシーズンからは、召集されたり、暖かい地方へ絵を描きに出かけたりして、赤城山にいる時間が短かったものだから、最初の年ほど熱心には滑らなくなった。しかし何といつても、輪かんじきより軽快で気持ちがよくつたので、赤城山へ帰るたびに実用的にも使うようになった。

やがてしばらくすると、前の年にはどうしてもできなかったものが、誰に聞くといいこともなしに、怪しげながら制動することも覚え、ボーゲン系統の曲がり方もいくらかできるようになった。そのうちに少しくらいなら荷物を背負つても滑れるようになったので、家にいた男たちにも稽古させて、ともかくも実用時代に入った。とはいうものの、まだ歩き方が拙いので荷が少し重いとはなはだ辛かった。輪かんじき組を追い越して得意になって歩いているうちに、

一度尻もちでもつくと大騒ぎだった。重い荷を背負ったままでは起き上がれないし、立つてからでは背負うことができないし、兜かぶとを脱いで輪かんじき組に起こしてもらおうようなこともあった。こんな時、輪かんじき組のニヤニヤ笑う顔が癩しやくだったが、何ともしようがなかった。

その後、北海道へ兵隊に行っていた友人から、初めてリリエンフェルト「金属締め具」のついている本式のスキーをもらったので、大いに感激して前のスプリングをがちゃつかせながら得意になって滑り回っていたこともあった。

それから何年かたった年の春早くのことだったが、東京辺の中学生が二人前橋道を登ってきて、外輪山の中まで入ってから濃霧のために雪の道を踏み迷い、ついに行方不明になってしまったことがあった。村中でその捜索に出ていった時、輪かんじき組よりもスキー部隊の方がはるかに行動軽快で、大いに活躍して山の人たちを感心させたことがあった。

この頃になるとスキーでよく夕方の散歩にも出るようになった。日の落ちてしまったあとの山の尾根から、灰色に暮れていく雑木林の谷の間を見下ろしながら、ゆったりと足を運ぶ自分自身の姿を、巨人の歩みのようだななどと思ったこともあった。

**日本最初のスキー倶楽部** それから数年ののち、たぶん大正七「一九一八」年頃のことだったと思う。東京駅のツーリスト・ビューローの二階にスキーの展覧会があるというので、わざ

わざ見に行ったことがあった。数はそんなにたくさんもなかったようだったが、何でもスイス  
辺りから持って帰ったという途方もない長いスキーが片方だけ立てかけてあって、脇に、その  
片方はどこかの山へ登った時岩に打ちつけて折ってしまった、というような説明がついてい  
たと思う。そのほか、まだ見たこともないようなきれいなスキーが、ずらっと並べてあったの  
で、それを見るだけでも楽しい気がして私は何度も見に行った。あんまりたびたび通っていっ  
たので、とうとう係の人と懇意になってしまつて、展覧会が終わつてから、六、七人の仲間が  
集まつてスキー倶楽部を作ろうということになつた時、私もその末席に加えてもらつた。その  
時のメンバーが誰々であつたかは、もうあらまし忘れてしまつたが、のちにスキー聯盟れんめいの会長  
をしていられた稲田さんが、当時まだ北大の学生だつたか、それとも卒業されたばかりくらい  
だつたか、真つ黒な顔をして元気いっぱい話していたのを覚えている。

その時の会の名は、たしか「東京スキー倶楽部」だつたと思う。T、S、Cを図案化して、  
バッジを作ろうという相談まで話が進んだので、山出しの私は、ただもうびっくりして聞いて  
いた。おそらくこれが日本最初のスキー倶楽部だつたことと思うが、その後私がジャワ辺りへ  
渡つていって、およそスキーとは縁のない常夏の海で、さんざん暴れ回つて帰つてきた頃は、  
もう解散していたようだった。

**スキー復活** 南洋から帰るとまた赤城山の生活が始まったので、再び私のスキーも復活した。しかしこんどは以前のようにひとりぼっちではなく、画家のMさんや、その他何人かの滑り友達もできてきた。

この頃はもう、『初歩のスキー術』というような本も出版されていたので、私たちはそれを買ってきては、みんなして炉端へ集まって読んだものだ。しかし滑降中の回転法等の段になると、いくら読んでもなかなか理解ができなかった。雪の上へ出て自己流でやれば、まだどうか曲がれるのに、本に書いてあるようにしようとすると、ほとんどみんな転倒した。読む方の頭も悪かったかもしれないが、説明の方も相当怪しげなものが多かった。ある本などは、著者自身あまり滑れないらしい人が、向こうの本を翻訳して出しているのなどもあった。それがまたひどく生硬な直訳ぶりで、読めば読むほどわからなくなるようなものもあった。

その頃私たちの間で、一時流行言葉にまでなったのでいまだに覚えているが、例えば「もしも諸君が、滑走中に転倒することを欲しないならば」という調子で書いてあるので、どんないい秘訣でもあるのかと思つて次を待っていると、「あまり速い速力を出さないことである」という文句なのだった。一生懸命聞いていた連中が呆気にとられて、教えられているのか、からかわれているのかわからない気がして、互いに顔を見合わせているようなこともあった。

ことにクリスチャニヤの説明なんか、「その時、そこにある椅子にでも腰かけるようなつもりで、腰を落とす」とか、また「自分のスキーのテールにあるマークを、振り返るようにして見るといい」とかいう要領の教え方もあった。今なら「ハハア、あのことの説明をするつもりだったな」と理解もつくが、当時の私たちには、それらの言葉は何としても不可解のものとしか思えなかった。スキーをはいて前の斜面へ出て、いくら一生懸命腰かけてみても、テールのマークを振り返ってみても、なかなかそんなことくらいでスキーは回らなかったし、無理に頑張つてやろうとすれば確実に転倒するだけだった。そしてその時の私たちの結論は、クリスチャニヤやテレマークは到底我々の手の届くところにある地上のものではないということだった。

それでもみんな雪ずれだけは相当にしてきて、山を歩き回ることとはだんだん達者になってきたし、写生に行くのにも、大きなキャンバスを持って器用な足取りで滑っていくようになった。

**赤倉行** その後「あんまり赤城にばかりいるのでできないのかもしれないから、ひとつ他所へも行って様子を見てみよう」というわけで、Mさんと二人で赤倉へ出かけていった。

赤倉は、さすがに早くから開けた有名なスキー地だっただけあって、宿の前の広いスロープには、スマートな恰好かっこうをしたスキーヤーが大勢集まって練習していた。見てみると、中にはテ



レマークをするものや、クリスチャニヤらしいものをしているのもあった。そこでこちらも早速斜面の端の方でコソコソ相談しながらそれを真似して終日猛練習を試みたが、なかなかうまくいくはずもなかった。それから次の朝はお天気もよかったので、勇敢にも前山から燕へ越すつもりで出かけていった。すると昨日ゲレンデで懇意になったテレマーク党の一人が、私たちと一緒に行くという。少なくともこちらよりはだいぶまそうだと思っただから、喜んで連れていってもらうことにした。私たちがそう思っただけでなく事実うまいに違いなかったのだが、だんだん奥へ進んでいくにしたがって山の様子は険しくなり、斜面も急になってきて、深い谷底のところどころには時々雪崩なだれの跡が見えるようになった。そのうちに雪の割れ目の上へ出てしまって、いやでもそれを越さなければならぬような所へさしかかると、山に慣れないその人は急に怖気おびけづいてしまって、テレマークどころではなく、ほんの簡単な斜滑降もできなくなってしまう。

こちらはおもともと山男なので、下手は下手なりに、転んでも必ず落ちて何とかがむしやらに進んでいくが、里のゲレンデだけに育った都会人には、スキーがうまくも身体に馬力がなく、そのうえ山にのまれてしまって精神的にも参って来たらしかった。手伝ってあげようにも、こっちもすでに怪しいのだから、先へ下りていて声援するくらいよりほか手の出しようも

なかった。しかしこちらには、まだ燕から関へ出て、その晩の夜行で東京へ帰る予定があったので、気はせくのだが、一人だけ山の中へ残して、自分たちが先へ行くわけにもいかず、気の毒でもあるし、時間のことが心配にもなるし、閉口したことがあった。だがともあれこのスキー行の収穫は、いろいろな意味で大きかった。

## 二 スキー行脚あんぎや

**大鰐おおたにの大会** 赤倉行で味をしめた私は、翌大正十三「一九二四」年の冬には、思いきって一人でスキー行脚あんぎやに出かけてみることにした。目的地は北海道から樺太からふとへ、それから都合によってはカムチャツカへでも渡りかねない意気込みだった。

愛用のリリエンフェルト・ビンディングけやきのついた櫂しやうぜんのスキーを担いで、飄然と赤城山を出たのは一月の中旬だった。途中五色温泉をふり出しに、一、二カ所寄り道をしただけで青森まで行ったが、駅のポスターで大鰐おおたににスキー大会があることを知り、わざわざあと戻りして見学に出かけた。何しろ生まれて初めて見るスキー大会なので何もかもただ珍しく、ひたすらに感激してその盛況を眺めていた。